

2019

フォローアップイベント
～つなぐ～
多文化共生社会の実現に向けて

国際交流基金
地球市民賞



JAPAN FOUNDATION

国際交流基金地球市民賞公開シンポジウム

日時：2019年7月27日（土曜日）13時～17時

於：じばさん三重

国際交流基金地球市民賞 公開シンポジウム
—目次—

あいさつ・企画趣旨説明 P. 2

柄 博子（国際交流基金 理事）

田村 太郎（ダイバーシティ研究所 代表理事）

鈴木 英敬（三重県知事）

市川 典子（四日市副市長）

オープニングセッション P. 5

「多文化共生の必要性 三重県の取り組み～異なる文化的背景を生かして一緒に築く地域社会～」

鈴木 英敬（三重県知事）

×

藤沢 久美（シンクタンク・ソフィアバンク 代表）

第1セッション「つなぐ人と組織をどう育てる？」 P. 8

〔登壇者〕

池田 誠（北海道国際交流センター 専務理事）

堀 永乃（グローバル人財サポート浜松 代表理事）

八木 浩光（熊本市国際交流振興事業団 事務局長）

〔モデレーター〕

田村 太郎（ダイバーシティ研究所 代表理事）

第2セッション「壁をこえる、つながるアート」 P. 14

〔登壇者〕

堤 佳奈（三重県文化会館「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト担当）

山野 真悟（特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター 事務局長）

横堀 ふみ（特定非営利活動法人ダンスボックス プログラム・ディレクター）

〔モデレーター〕

若林 朋子（プロジェクト・コーディネーター／プランナー

立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科 特任教授）

《番外編》 3月26日ワークショップより P. 20

「アートによる社会課題の解決」～三重県文化会館の取り組み～

菅原 直樹（Oibokkeshi（オイ・ボッケ・シ）代表）

×

堤 佳奈（三重県文化会館「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト担当）

主催者代表あいさつ

国際交流基金 理事 柄 博子

2019 年 4 月に改正入管法が施行され、今回のシンポジウムのテーマとなっている多文化共生は、これまで以上に私たちが考えていかねばならないテーマとなっています。

国際交流基金は日本語教育にも力を入れており、日本語能力試験（JLPT）に加え、2019 年 4 月からは外国人材向けの日本語基礎テスト（JFT-Basic）を開始しました。その他に、2014～2020 年にかけて約 3000 人の日本語指導助手をアジア各国に派遣する事業も行っています。この事業は、派遣先で外国人として暮らすことにより、帰国後に国際文化交流や多文化共生、日本語教育に大きな関心を持っていただくきっかけとなっています。

今回はモデレーターの 3 人の方々（田村太郎さん、藤沢久美さん、若林朋子さん）が献身的にプログラムを考えてくださり、このお三方のご尽力がなければこのような形でシンポジウムを開催することはできませんでした。また、三重県庁、四日市市、多くの関係団体の皆様にご協力を頂きました。心よりお礼を申し上げます。

企画趣旨説明

国際交流基金地球市民賞 選考委員

ダイバーシティ研究所 代表理事 田村 太郎



今回のテーマは「つなぐ」です。過去の地球市民賞受賞団体に登壇いただき、これまでどんな苦労があったのか、地域の国際交流や多文化共生などにどのように取り組んで広めていこうとしているのかをディスカッションします。

今、ダイバーシティの推進で一番大きなテーマは、担い手の多様性をどのように広めていくかです。多様性を進めていく人たちも多様でないといけない。行政だけでできるものではないし、企業だけでやりきれるものでもない。地域の中だけでやるものでもないし、大学やさまざまな担い手が連携しながら、まさに“つながり”ながら進めていかないといけない。そういう局面まで日本も進んできました。

市川副市長のお話にもありましたように、多文化共生は字面ではきれいだが実際はとても大変なことで、地域の方々のさまざまな苦労を経て今に至っています。そこから得られる経験はかけがえのないものであり、他の地域にも生かされていくのだらうと思います。これからのセッションでいろいろな経験、苦労、楽しさ、地域で直面している課題を共有しながら、次に何をしていくべきかのヒントをお持ち帰りいただけたらと思います。

後援者代表あいさつ

三重県知事 鈴木 英敬



三重県は現在、人口に占める外国人の割合が 2.78%で全国 4 位、公立小中学校に通う日本語指導が必要な児童・生徒の割合は全国で 1 位です。私たちは共に暮らす仲間として外国人の皆さんとどうつながっていくか、そのための手法についてしっかり取り組んでいかねばならないという流れで多文化共生に注力してまいりました。

このフォローアップイベントは 2016 年から始まったということですが、2016 年というのは三重県にとって大変重要な G7 伊勢志摩サミットが開催された年です。そこで、多様性というのが三重県の重要な強みであり、これからの時代には必要ということで、多様性に対する寛容さをより促進しようと、2017 年度からダイバーシティ推進課という課を都道府県で初めて設置しました。それを踏まえてダイバーシティ推進方針という、すべての政策にダイバーシティを組み込む方針を策定しました。現在それにのっとったさまざまな取り組みをしていますが、ダイバーシティは行政だけでできるものではなく、県民の皆さんの行動が大事です。ぜひ今日お越しの皆さんお一人お一人の行動につながる、そんなシンポジウムになることを期待しております。

四日市市副市長 市川 典子



四日市市は、2019 年 6 月末現在、69 か国、10,016 人の外国人市民が暮らしており、特に 1990 年代からは、ブラジルをはじめとする南米の方々がたくさん定住されています。正直に申し上げて、当初は地域でも混乱がありました。ごみ出しや騒音、路上駐車など、多文化共生というきれいごとでは済まない、そういった摩擦が住民間で生まれました。その中で、自治会長をはじめとする地域住民の皆さんが地道な努力を重ねてこられ、市は外国人市民が集住する笹川地区をモデル地区として、多文化共生の取り組みを重点的に進めています。また、最近では、ベトナムといった東南アジアの方々が特に増えており、総合的な相談窓口の整備も進めているところです。

本日は多文化共生の専門家の皆さん、そして、さまざまな地域でキーパーソンとして活躍しているの方々のお話をこの四日市市で伺える非常に貴重な機会です。このフォローアップイベントを機に、ますます行政と市民が協力し合って、多文化共生に向けた取り組みを進めてまいりたいと思います。



四日市市の工場地帯

オープニングセッション

「多文化共生の必要性 三重県の取り組み」

三重県の多文化共生に関する取り組みの事例と背景を、
鈴木英敬三重県知事にお話を伺う。

登壇者

鈴木 英敬（三重県知事）

藤沢 久美（国際交流基金地球市民賞 選考委員
シンクタンク・ソフィアバンク 代表）

藤沢：

このシンポジウムの前に外国人集住地区の一つである四日市市笹川地区を訪問してきました。意見交換の中で課題に挙がった一つが教育です。いろいろな言語で対応しないといけない中で、公教育に誰もがアクセスできるようにするにはどうしたらいいのかという大きな課題があります。これについて知事はどのように考えていらっしゃいますか？

鈴木知事：

松阪市や四日市市でのプレスクールや、日本語教育のコンテンツ作り等のモデル事業があるのですが、私たちの仕事は其中で問題意識を投げかけて情報共有し、それぞれの地域の知見やグッドプラクティスを生かし、やり方を開発していくことだと思っています。各地域の状況に合わせて受け皿を作って横展開することが重要で、教育の実践の場面から出てきた知見を使って、コミュニケーションや暮らしの場で支えていければと考えています。

藤沢：

県庁内各部局を横断する会議や、外国人住民を交えた会議なども行っているのですね。

鈴木知事：

はい。庁内調整会議はこの（2019年）1月に作りました。あと、外国人目線での情報発信もポータルサイトでやっています。やはり外国人目線の情報は重要なので、会議で得た情報を担当部署で共有していくのは大事です。日本語教室で外国人目線の意見を聞いたときもなるほどというのをいくつか頂きましたが、大事にしたいですね。

例えば近隣の大きな工場で外国人派遣労働者の大規模な雇い止めのようなことが起きたときに、部横断で連携して、ダイバーシティ社会推進課と雇用対策課が窓口になって合同出張相談会を行ったり、県営住宅に優先的に入れるよう県土整備部が対応したりしました。これからも入管法改正も意識しながら庁内調整会議を機能させていくことが大事です。



また、行政によくある話で、スターティングメンバーの課長さんたちは熱くいろいろやってくれるのですが、代替わりしたときにその熱さがなくなって、また縦割りに逆戻りしてしまうことがあるので、そうならないようにしっかりやっていきたいですね。ちょうど今年（2019年）8月から外国人のためのワンストップ相談窓口「MieCo」を開設するので、そこでもいろいろな情報を聞きながら横展開していけるようにしたいと思います。

相談無料 FREE CONSULTATION TEL 080-3300-8077

みえこ MieCo
Mie Consultation Center
for Foreign Residents

げつようび きんようび
月曜日～金曜日
Mon.～Fri.
9:00～17:00

みえ外国人相談サポートセンター

日本語 にほんご	がいこくじんのためのそうだん
英語 English	Consultation for Foreign Residents
ポルトガル語 Português	Consulta para residentes estrangeiros
スペイン語 Español	Recepción de Consultas para residentes extranjeros
フィリピン語 Filipino	Konsultasyon para sa mga dayuhan
中国語 中文	为外国人提供咨询
韓国語 한국어	외국인을 위한 상담
ベトナム語 Tiếng Việt Nam	Tư vấn dành cho người nước ngoài
ネパール語 नेपाली भाषा	बिदेशी नागरिकहरुको लागि परामर्श
インドネシア語 Bahasa Indonesia	Konsultasi bagi warga negara asing
タイ語 ภาษาไทย	ให้คำปรึกษาสำหรับชาวต่างชาติ

UST-TSU Bldg. TSU Sta. R23

公益財団法人 三重県国際交流財団(MIEF)
Mie International Exchange Foundation
津市羽所町700番地 アスト津3F
Mie-ken Tsu-shi Hadokoro-cho 700
UST-TSU 3F
URL: <http://www.mief.or.jp>

藤沢：

企業が外国人を雇用するメリットや良い例を、ぜひ広めていただきたいと思います。

ところで、笹川での意見交換会でも話題に上ったのですが、学校等で一定数以上のグループができると対立が起きることがあると。そのようなことがあると、県全体では多文化と呼べても、地域単位で見ると対立になることもあるのではないかと思います。



藤沢：

ところで今、雇い止めのお話がありました。笹川地区もそうですが、住民の方々はかなり生活に慣れて定着してきて、2世代目に入ってきています。そのような外国人子弟の方々が進学して良い会社に入ろうと思ったときに、産業界として外国人の方々を受け入れるような、日本人のようにきちんとキャリアに乘せられる産業政策はあるのでしょうか？

鈴木知事：

どういう企業で働くといいのか、外国人の児童・生徒にも知ってもらおうと、今年（2019年）から中学生が企業でインターンシップできる制度を設けました。企業側においては、技能実習生だけでなく、地域に住んでいる子どもたちと働くということを受け入れ、理解してもらえればと考えています。

また、^{こものちょう}菰野町にある会社では、そもそもダイバーシティ雇用で、ベトナム人を日本人と同じ条件で雇用しています。社長がハノイ工科大学まで直接スカウトに行くなど、とてもうまく機能しているので、やったらできるのだという事例をもっと皆さんに知っていただきたいですね。

鈴木知事：

住む地域をこちらでは決められないし、難しい問題だと思うのですが、中でいかに混ざるか、お互いの理解を進めたり、実際にコミュニティーの中に入ったりしてもらう。

例えば鈴鹿市でミャンマーの難民家族を受け入れている工場があるのですが、その社長が自治会の会長で、自治会を挙げて受け入れてくれて、大きなグループ同士ということではないが、その地域内で根っから混ざり合うということを地域のリーダーがやっています。

学校の教室であれば、先生が混ぜていくということをやったら良いと思うし、県としてはうまくいっている事例を皆さんと共有したり、ワークショップを開いたりということができます。

温度差もあると思いますが、まずは目の前に共生すべき人がいるところで努力をしていくということではないでしょうか。

藤沢：

そうですね。また、まちの人々をつなぐきっかけと

して防災活動への参加を呼びかける話をよく耳にしますが、もう一つ、昨年（2018年）のシンポジウムでもテーマになったアート、芸術でつながるケースもあります。何か良い事例はありますか？

鈴木知事：

津に劇団が移住してきて、台湾などの劇団を呼んで交流したり、海外公演を行ったりしています。

また、最近すごく良いなと思ったのが、^{みはまちょう}御浜町で小学生がタンザニアの絵画を覚えて情報発信をしていて人気が出つつあるのですが、メジャーな先進国ではなく、普段交流が少ない国×人口の少ない町×子どもの3つの要素が掛け合わさった良い交流だなと思います。

それから、志摩の^{だいおうちょう}大王町にダウン症の人のための「アトリエ・エレマン・プレゼン」という、フランスと交流して頑張っているアトリエがあります。大王町は昔、絵描きの町だったんです。こちらも国際交流×障害×アートと掛け合わさった濃い活動だと思います。

藤沢：

なるほど、こうして伺うといろいろあるんですね。アートが素晴らしいのは「感じる」ということで、言葉がいらないということ。今後はアートも使って多文化共生を進めてみてはいかがでしょうか。

最後に皆さんに呼びかけ等があれば、よろしくお願いします。

鈴木知事：

カナダのトルドー首相の言葉に「今ほど変化のペースが速い時代は過去になかった。だが今後、今ほど変化が遅い時代も二度とこないだろう」というものがあるように、これからの未来は異なる文化の人と接する機会が増えても、減るということはないですよ。ということを考えれば、今できていない人も異なる価値観や文化の人と共に生きていく、暮らしていく時間、空間を増やすことを意識して、後には意識せずにやっているとかが来たらいいなと思います。なるべく早く、三重県民の皆さんが意識せずに共生できる時がくるように、しっかり努力します。本日はありがとうございました。



第1セッション

「つなぐ人と組織をどう育てる？」

日々の活動の中で、さまざまな立場の人々と、どうつながり、連携し、その関係を育てていくのか。各地域で橋渡しとして活躍しているキーパーソンの話を聞く。

登壇者

池田 誠（北海道国際交流センター 専務理事）

堀 永乃（グローバル人材サポート浜松 代表理事）

八木 浩光（熊本市国際交流振興事業団 事務局長）

モデレーター

田村 太郎（国際交流基金地球市民賞 選考委員、ダイバーシティ研究所 代表理事）

田村：

まずは登壇者の皆さんから活動紹介および自己紹介をお願いします。

池田：

北海道国際交流センターの池田です。当センターの主な事業は、ホームステイです。僕は2001年から携わっているのですが、前職の旅行会社時代に、このホームステイ事業を担当したのをきっかけに、さまざまな土地を巡るよりも、もっとじっくり人と接したいと考えるようになったんです。一時は農業を志し、家族でニュージーランドに移住して、1年間有機農業やグリーンツーリズムについて学びました。そんな経験を経て、現在に至ります。



ホームステイ事業の一つは、「国際交流のつどい」で、日本在住の留学生が農家で2週間ホームステイするというもので、1979年から行っています。留学生が参加費を払って農作業をすることで草の根交流を育む趣旨ですが、実はこの事業、参加者が増えれば増えるほど手間と赤字が増え、1981年頃には財政難になってしまいました。

そんなときに当時の代表が、国際交流基金の発行していた雑誌に事業のことを寄稿し掲載された。それが朝日新聞の目に留まり、1982年に「天声人語」に掲載されました。それを機に、国際交流基金や北海道からの助成金が出るようになり、北海道全域で事業を展開していたので、さらに各地域から負担金が出る仕組みができました。

もう一つは日本語日本文化講座夏期セミナーという、日本語を勉強しているハーバードやプリンストンなどの優秀な大学生を2か月間受け入れるというものです。参加費は授業料と教材費を合わせて6000ドル（約70万円）で、毎年約120名の応募があり、そのうち60名が参加しています。

海外の大学と連携した日本語教育

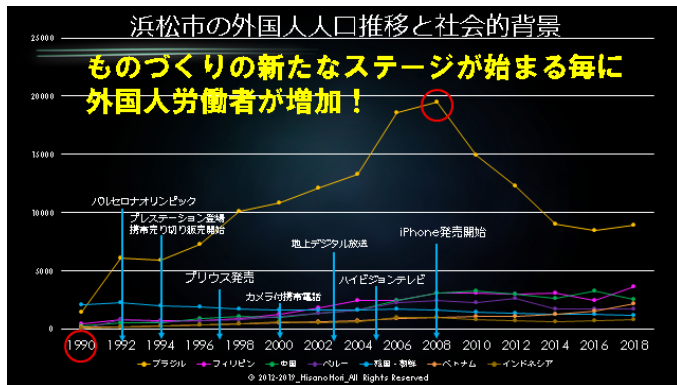
2ヶ月間60名の大学・大学院生などがホームステイをしながら日本語・日本文化を学ぶプログラム。ハーバード、イエール、プリンストン大学などから、34年間で1963名が参加



北海道国際交流センター資料より「日本語日本文化講座夏期セミナー」の様子

彼らは午前中日本語を勉強し、午後からは日本文化を学び、日本の家庭でホームステイします。ホストファミリーを探すのが大変だったり、アメリカから日本語教師を呼ぶ経費はこちらがもったりはしますが、ビジネスモデルとしては成り立っていると思います。

グローバル人材サポート浜松の堀です。私はもともと浜松国際交流協会の職員で、ずっと外国人支援に携わっていました。浜松市は外国人人口が非常に多いんです。



グローバル人材サポート浜松を立ち上げるきっかけになったのは、2008 年のリーマン・ショックです。相談窓口にいる私の前に、100 人の外国人の列ができました。日本語が話せないため仕事がなく、なかには自殺に追い込まれる方も……。ものづくりのまち浜松の責務として、お世話になっている外国人を見放してはいけないと、2009 年に設立しました。「人は地域の財産！人がいなければ社会は成り立たない」というのが理念です。

ところで浜松には、外国人の要介護者がすでに 100 人以上います。そのため多言語で介護サービスが受けられるようにと、外国人介護ワーカーの育成を進めています。静岡県内の外国人介護ワーカー 220 人のうち、90 人がうちの卒業生です。

介護の研修はあえて屋外で行います。これは、閉ざされた場所だと、外国人ということで日本人との壁ができてしまうケースがあるためです。バスターミナルで研修したりすると通りすがりのの方が「何をしているの？」と声をかけてくれ、「介護の勉強をしています！」と笑顔で話すと、「偉いわね」と差し入れをくださったこともあります。



生徒たちは「私たちはマイノリティーだけど、役に立っている。だから介護の仕事をしたい」と言います。介護の現場ではダイバーシティ化が進んでおり、外国人が活躍しています。彼らは立派に日本社会を支えているのです。そんなことが当たり前になる世の中を作るべく活動しています。

私は熊本市国際交流振興事業団で多文化共生事業に取り組んでいますが、もともとは商社勤務でした。



9

タイの山岳民族の方たちと話すと、日本の地方と同じような課題を抱えていることに気づきました。働き手の不足、高齢化社会……、何か一緒にできることがあればとプロジェクトを考えています。



熊本市国際交流振興事業団の活動を支える留学生の皆さん

当団は、2016年の熊本地震での外国人被災者支援活動が評価され、同年に国際交流基金地球市民賞を受賞しました。ただ、評価されたのは私たちの団体ではなく、団体を支えてくれたボランティアや外国人住民だと思っています。震災時に熊本にいた留学生は、「あの時は大変だった。でも、日本人が支えてくれた！怖い経験だったけど熊本にいて良かった！」と言ってくれました。また、日本語教室のボランティアの方々がいたから外国人の被災者は困らなかったのだと思います。

田村：

皆さん、ありがとうございます。

では、ここからは二つのテーマで話していきたいと思います。まず、「つなぐ」について。これまでの活動の中から、こういう人とつながることを意識したとか、つながり方の工夫など、皆さんのヒントになるようなエピソードをお願いします。

池田：

北海道国際交流センターは、民間団体であるため信用されにくい面がありました。これでは活動が広がらないということで、JICAの国際協力推進員を函館市に派遣してもらい、うちの事務所に在籍させるという手法をとりました。そこからJICAとのパイプができ、国際交流から国際協力の仕事までやるとい

うことでつながりを作ってきました。

国際交流をやっていると、地球全体のこととして環境保全についても考えます。特に北海道という地域の自然もありますので、海外のボランティアを集めて「大沼ワークキャンプ」で、環境保全活動をしていたら、それが環境省の目に留まり、七飯町大沼が、ラムサール条約湿地に登録されました。もちろんこの活動だけではなく、地域の活動もあつてのことだったのですが、環境省から協働取組事業ということで事業費を頂いて活動するようになり、環境省ともつながることができました。



湖の環境保全のため漁船で向かうワークキャンパーたち

さらに、我々の持っている国際交流の視点を生かした厚生労働省の事業にも取り組んでいます。若者の就労支援をする「地域若者サポートステーション」や、生活困窮者の学習支援などですね。多様な人たちと接してきた経験を国内の課題に使っていかうと考えたときに、社会になじめないような人たちに、異文化交流という視点で取り組んでもらおうと。若者の就労支援では外国人と会話してもらおう等、自信を持つきっかけとなるような機会を創出しています。

田村：

さまざまな目的に向けて、環境だったり若者の就労だったり、国際交流という手段をうまく使っていますよね。

では次に、堀さんお願いします。

堀：

浜松国際交流協会での経験と、そこで出会った人たちを大事にしてきたことが今につながっています。静岡県とも仲良くしており、介護保健課の課長に私の考えるビジネスモデルを話す機会をもらって予算をつけていただく等のつながりもできました。多文化共生の活動をするにあたっては、「多文化共生島」にいてはいけない。その向こうにいる人たちとどれだけ付き合うかが大事です。

協会時代はあまり行けなかった市長室にも独立してから普通に行けるようになり、市長と対話する機会が増えました。また、外国人関係だけでなく、産業振興課や学校教育課、それぞれの部署のキーパーソンとつながっています。当事者から見た市の問題を直接お伝えし、新しい施策も生み出しています。



リーマン・ショック後の外国人就労支援では国が予算をつけてくれましたが、一番考えたのは費用対効果でした。税金を使っているのだから、何名を就労させるか。そのためには企業の人たちともつながっていないといけないと思い、就労に特化した日本語教育について日本語の先生方とかなり膝を突き合わせて話しました。

そして、わらしべ長者のようにグローバル人材サポート浜松の理事長（当時はヤマハ株式会社の会長）と一緒にヤマハにお願いに行く。そして5日間の職場体験をさせていただく。すると5日間仕事ことができました。そして、次の会社を紹介していただくという形で180社くらい回りました。そんなことを続けているうちに、「話は聞いてるよ！」と迎え入れてくれる企業が多くなっていきました。

「つなぐ」というのは結局人と人のことだと思うので、まずは自分のことをしっかり知ってもらい、その上で外国人の良さを知っていただき、そこでは自分がいかに黒子になれるかということだと思います。

田村：

インターネットやSNSが普及して、これまではつながりにくかった人とも気軽につながりやすくなったと思います。「社会は変わっている。私たちも考え方やコミュニケーションのスタイルを変えていかないとはいけない。あなたの力を貸してください」と、もっとズケズケとダイレクトに言っていいたいんです。皆さんそういうところが意外とおっくうになっている。もっと果敢にアタックすればいいのに！ と思います。駄目と言われてもいいんです、失うものはないんだから。

八木：

「つながる」ということに関して、熊本地震では必要な支援が必要なところに届かなかった現状をたくさん見てきて、つながりを三つの視点から整理する必要があると考えました。一つ目は「地域内のつながり」。二つ目は「地域を越えたつながり」。もう一つは「つながりをいかにコーディネートしていくか」です。



熊本市国際交流振興事業団資料より

一つ目の「地域内のつながり」は、顔の見えるつながりをいかに作っていくか。普段の身近な地域社会活動にいかに関外国人住民の方々を巻き込んでいくのかということです。例えば大学一つとっても、留学生と日本人学生の間にはまだまだ隔たりがあります。それをなくしていくような、小さなつながりの関係を見直す時期にあると思います。



イスラム教徒によるカレーの炊き出し ～外国人コミュニティーが支援・活躍した熊本地震

災害発生時に威力を発揮するのが、二つ目の「地域を越えたつながり」です。災害が起きたとき、地域内だけで解決するのは無理なことです。地域外からの支援が必要になりますが、支援者とのつながり、信頼関係がないと受け入れは容易ではありません。受援力を育てていくには、地域外のつながりを普段から作っておくことが大切で、何かあったときは集まる。また、他のどこかで何かあったときは駆けつける、という地域を越えたつながりが大事です。

そして三番目が「コーディネーション」。被災地のニーズに対して支援する団体はたくさんあるのですが、顔が見えないことで行政として受け入れられないケースが多くありました。ボランティア希望者が1万人以上いても、マッチングができたのは6,000人ほど。ところが被災地に行けば、まだまだ支援が必要で、この需要と供給のミスマッチをどうするのかが課題です。

また、外国人住民は言葉、文化、習慣の違いを乗り越えれば日本人住民と同じように活動でき、地域を支える担い手となることが期待できます。そんなボランティアや担い手と地域をつなげるコーディネーションが大事で、つなぎ手を育てていくことが重要になってくると思います。

田村：

去年の地球市民賞フォローアップイベントのワー

クショップでも議論しましたが、やっぱり顔と顔でつながっておくのはとても大事だし、でも多くの方は顔と顔でつながっていないわけで、ではどうやってそれをつないでいくのかというところで、つなぎ手の役割が大事なのかなと思います。顔の見える関係性をどうやって広げていくかが重要ですね。

では次に、「育てる」というテーマでお話いただけますか。これからこんなことを考えているや、どう関係を育てていくか。池田さん、いかがでしょうか？

池田：

当センター発行の『@h [アット・エイチ]』というフリーペーパーが「日本タウン誌・フリーペーパー大賞」で、最優秀賞を受賞した時の授賞式で、隣にいた女性にシンポジウムの登壇を提案してみたら実現しました。その後、彼女は地元で活躍し始めました。また、ホームステイをやりたいと直接相談に来た大阪の方や、バリのダンスコンテストで優勝した日本語をあまり話せない日本人、カフェの感じの良い店員……このように違う分野からリクルートすることでさまざまな視点が生まれますし、組織の向こうとつながり、育てるということにもなると思います。



堀：

私は、外国人による「多文化コンシェルジュ」を育成しています。コンシェルジュとは、情報のハブという意味です。同じ国の出身者に、日本での生活や浜松のアピールをしてもらう。また一方で、自国の言語、文化、価値観についても日本人に紹介いただく。これを商標登録したところ、企業から多文化コンシェルジュの育成を依頼されるまでになりました。もう一つ、浜松には外国人が集住する団地がありますが、入学前の子どもたちに対して、1週間学校の

模擬体験をしてもらう「就学前学校体験教室」をやっています。その活動の担い手は大学生で、彼らが大人になって家族を作ったときに、ママ友としてパパ友として、外国にルーツのある子どもに理解ある人になってほしいと願っています。

八木：

堀さんがお話しされたように、私も体験を通した学習を提案したいです。学校教育を、「知識として覚える」から「知識を生かして考え、さらに行動する」経験学習の場に変えていくことが大事だと思うんです。

世界の大きな課題を身近な社会と結びつけて地域で行動してみる、その体験したことを学校に持ち帰って検証して、これをもう一度社会に返して実践するという経験学習のサイクルを作っていく。その中にダイバーシティ、多様性を尊重する、ということも入れていく。これを推進していくことが、今後とても大事だと思います。

によって自分も変わるし、社会も変わるということが学びなのではないでしょうか。

田村：

NPO も企業も自治体も、これからはいろいろな人が活躍する場にしないと、地域も社会ももうもたない気がします。

今、留学生をもっと受け入れるという話になっていますが、ここにさらに社会人が入ると良いと思います。若者が社会人や留学生と共に学ぶ環境は、卒業後に良い影響を与えるはずです。いろいろな人たちが同じところで学んで育っていく環境を作れる地域になれるか。四日市にはそんなポテンシャルがありますし、登壇者の皆さんは人をつなぎながら新しい多様性を生み出していく、そんな活動をされていると思います。



学生ボランティアによる日本語指導

学校教育でいうと、例えば高校には、ほぼ同じレベルの人が集まっている。これって幅広い世代、障害の有無など多様な人が暮らす実社会とかけ離れた非日常の社会だと思いませんか？そこで同調を要求される生徒たちは何か違う？と自分の気持ちと葛藤しながら、すごくあがいているわけです。そこがいじめの温床となり、排除が出てくる。いろいろな人たちが交流し、学び合えるように社会教育と学校教育とをつなげていくことが必要です。それ

第2セッション

「壁をこえる、つながるアート」

アートの長所である「壁のなさ」により、さまざまな立場の人がどのようにつながって多文化共生等の社会課題に生かせるか、またはアートがどのような影響を及ぼしているのか。事例をもとに、テーマについて語り合う。

登壇者

堤 佳奈（三重県文化会館「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト担当）

山野 真悟（黄金町エリアマネジメントセンター 事務局長）

横堀 ふみ（ダンスボックス プログラム・ディレクター）

モデレーター

若林 朋子（国際交流基金地球市民賞 選考委員、プロジェクト・コーディネーター/プランナー）

若林：ここからは「壁をこえる、つながるアート」ということで、アートをテーマに議論を進めます。多文化共生にアート？と思われるかもしれませんが、実はアートや、アートを作り出すアーティストというのは、「つなぐ」ことが大得意なんです。



こちらの図をご覧ください。真ん中をアート、全体を社会とすると、アートが他の領域と関わる機会が増えています。災害復興や防災教育をはじめ、多文化共生や国際交流、育児支援、生きづらさ支援、若者の就労支援、産業振興、コミュニケーション力の調整など、あらゆる分野にアートが関わっています。ということで、今日はアートと他の領域の接点の拡

大、つまり「アート×〇〇」の実例を具体的にお三方にお話しいただきます。

では、堤さん。3年間のプロジェクトで、今年（2019年）3年目に入った「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクトについてお話しいただけますか。

堤：

当館のような「劇場」というと、音楽や演劇を行う場所というイメージが強いかと思いますが、実はそれだけではありません。貧困や障害、さまざまな理由で社会的に困難を抱えている人々に対してアートの力で問題を解決する手助けをして、生活を楽しんでもらう社会包摂という機能の一端として、新たな試みを2017年より始めています。それが「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクトです。



このプロジェクトは、介護の現場に演技の手法を取り入れた体験講座を行ったり、今年（2019年）93歳になる看板俳優の「おかじい」と一緒に演劇活動をしている「OiBokkeShi（オイ・ボッケ・シ）」主宰で俳優、介護福祉士でもある菅原直樹さんとタッグを組んで、私たちにとって身近なテーマとなりつつある「介護」「老い」という二つの視点から、県内各地で事業を展開しています。事業の柱の一つが、「介護を楽しむ」こと。

「介護を楽しむ」というのは、介護の現場に携わる職員や専門学校の先生・生徒、それから認知症の方とその家族、また超高齢化社会を担う子どもたちに向けて、講演会や演技を取り入れた体験講座を開催

しています。この講座では、介護をする側と、される側のより良いコミュニケーションを考えて、新しい介護のモデルケース作りに取り組んでいます。



「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクトの高田短期大学介護福祉コース（三重県）での体験講座の様子

もう一つの柱は「明るく老いる」というもので、参加者の皆さんに人生を振り返ってもらって「老いをポジティブに捉える」ということをしています。老後が想像できない世代や、老いに直面してさまざまな悩みを抱えている世代が、演劇を通して老いた自分をリハーサルすることで不安を解消したり、老いに前向きになったりできる演劇の体験講座です。

例えば、認知症の方が子どもたちのためにスーパーでいつも同じものを買ってきてしまう。その状況を皆で演じてみると、その解決策が見えてきたりする。親と子、家族という固定された関係では見えなかったものが、違う役を演じて関係性が変わることで気づくことができるんです。

よりよく老いるヒントは遊びの中にあるというのをモットーに、老いの明るい未来を模索する集団「老いのプレーパーク」も結成しました。いろいろな世代に入ってもらうことで化学反応を起こしたので年齢制限は設けず、19～90歳と幅広いメンバーが揃いました。定年退職したシニア、医学療法士、認知症を患っている本人と介護する母娘等、顔ぶれもさまざまです。

2018年12月に発表公演「老いたら遊ぼう！『老人ハイスクール』」を上演しました。このときは演劇だ

けでなく、死とか老いに対しての暗いイメージを明るいものに変えていこうと、ロビーで納棺体験をしてもらう等、いろいろな展示やパフォーマンスを行いました。いずれも医療、介護の両面から専門家を招いて3年間記録をとって分析調査し、レポートとしてまとめる予定です。



老いたら遊ぼう！『老人ハイスクール』（2018年）撮影：松原豊

若林：

認知症の人が見ている世界を自分が演じることで想像するというように、多文化共生もおそらく同じで、自分とは違う他者がどんな世界を見ているのか、どういうことを考えているのかをいかに想像できるかに尽きます。そんなときに参考になる手法ですね。では次に、横堀さんお願いします。

横堀：

神戸の ^{しんながた}新長田 という下町から来ました「ダンスボックス」の横堀です。神戸は多文化共生に関わる活動をしている団体が多いのですが、1995年の阪神淡路大震災をきっかけに、どうすれば皆と一緒に生きていけるのかという問題が可視化され、活動がより深まりました。ダンスボックスは新長田に100席程度の劇場を設けており、そちらでダンスを中心としたプログラムを行っています。このまちにおける国際性とどのように向き合ってきたか、一例をご紹介します。

2017年に演出家の筒井潤さんと実施した事業に、新長田で踊っている人に会いにいくというものがありました。とにかく踊っている人と会って、稽古を

見せてもらって話を聞く。踊りを通してそのまちを知るということを5年かけてやり、『滲むライフ』という作品を作りました。



リサーチの過程で在日コリアンの方の多い老人ホームで朝鮮民謡の『アリラン』がかかった途端におじいちゃんおばあちゃんが総立ちで踊りだして、こんなに美しいダンスがこの世にあるのかと衝撃を受けて、私はこのおじいちゃんおばあちゃんたちの体に記憶されている文化に興味を持ちました。



「新長田のダンス事情」2010年 コリアンデイ@故郷の家 神戸

どのようなプロセスでおじいちゃんおばあちゃんたちのダンスの記憶を舞台に起こすかというと、毎週末に「故郷の家」というデイサービスに通って、皆さんといろんな曲をかけてエクササイズをしました。どういう音楽をかけたときに自然な踊りが出てくるのか、エクササイズが終わった後は皆さんからお話を聞くということを10か月ほどやりました。そして町内のお寺など、皆さんにとって大切な場所を案内していただくなかで、踊りに加えて儀式にも着目するようになりました。故人の命日に行う儀式

だそうですが、皆さんに聞くと、もううちはやっていないと。準備がとても大変で、特に用意する女性が大変なのだったということでした。

この「チェサ」という儀式を踊りと一緒に取り上げてみようということで、とにかく足を運んで話を聞いて、出演を口説くために、ときにはカラオケをしたりしました。そうすると、ダンスだけがあるのではなく、生活のあらゆることとつながっているのがわかってきました。

『滲むライフ』制作の過程で私たちが大事にしてきた筒井さんの言葉をご紹介します。



筒井潤+新長田のダンス事情『滲むライフ』本番風景

「自分の想いを伝えるということを優先順位の高いところに置かずに、ただただあるものを映す」

「時間が経る中でのいろいろな変容をどちらが良い悪いではなく、ただ変わっている状況を観察して描くことを大事にしよう。これは芸術のできる一つの役割です」

「誰かが優れて誰かが優れていないということにしない。そのために細心の注意を払います」

「その全てが見えないという事実が明らかになったときに、だからこそ対応できるメディアとしてあるのが芸術だと思うんですよね。その全ては見えないという不安を抱えながら上演することも大事です」

若林：

堤さんは「介護・老いる×アート」ということでし

たが、横堀さんは異文化にダンスなどの表現で切り込んでいくというプロジェクトを紹介してくださいました。

続きまして、横浜の黄金町で取り組まれているアートプロジェクトについて、山野さんお願いします。

山野：

黄金町エリアマネジメントセンターの山野です。黄金町というまちは戦後長い間、売買春で全国的に有名なところでした。常時 260 軒ほどの店があり、外国人女性が多く働いていました。阪神大震災をきっかけに、京浜急行の高架下にあった店が耐震工事のため立ち退きとなりましたが、ただ他のエリアに移動しただけで、範囲がさらに広がっていく中、2005 年の県警による一斉摘発で、町は空っぽのゴーストタウンになり、治安の問題が残り続けました。その対策として黄金町をアートのまちにしようということで、(1) 売春の店舗を借り上げてリノベーションし、アーティストの制作の場にする (2) 高架下に新たな文化施設を作る、この 2 点を並行して進めました。

我々の団体は、その管理者としてスタートしました。アーティスト・イン・レジデンスとアートイベントを催す。そしてもう二度と昔の黄金町には戻さないように、アートを通じて創造的で特色あるまちを形成する。地域の皆さんがもともとアートをやりたい！ と言ったわけではなく、行政の提案だったので、地域の人々はアートって何だ？ という思いが強かったと思います。



アーティストのスタジオとして生まれ変わったまち並みを紹介するガイドツアーの様子

とりあえずまずはアートフェスティバルをやって、人が戻ってきたら、アーティストが常駐することによって、経済再生も含めて再生を図っていこうという試みです。この施策によって人口は増えましたが、富裕層が流入してきたとか店が増えたとか、ジェントリフィケーション（高級化）が起こる段階には至っていません。

組織は基本的には、アート部門とまちづくり部門の二本柱で成り立っています。年 1 回、「黄金町バザール」というアートフェスティバルを開催しているのですが、東アジアや東南アジアを中心にアーティストを招待します。



壁画を制作するシンガポール人アーティスト

こうした事業を手掛けているのは、私が福岡で仕事をしていたとき、アジアのアートとのコネクションがあったのと、この地域が小学生の 3 割が外国籍という多国籍エリアであるためです。黄金町に来るアーティストの特徴の一つとして、リサーチをします。同じ出身国の人の所に行くケースが多いですね。それを素材に作品を作ることで、そのまちに住む人々が浮かび上がってくる。また、アーティストの制作風景に登下校の子どもたちが興味を持って交流が始まったのをきっかけに、子どもたちの創作活動の場である「黄金町 BASE」ができ、多国籍の子どもたちが集まっています。

若林：

黄金町の特徴は、正面突破を試みても突破できないところを、アーティストを媒介することで非常にスムーズにいたり、あるいは地域の皆さんのモヤモヤをアーティストが引き出して問題提起したり、そういう形でアーティストが地域に入り込んでいる全国的にも希少な事例ですね。

では次に、異なる他者（異文化）とつながることの可能性について語り合いたいと思います。お互いの発表について感じたことなどをお願いします。

山野：

「OiBokkeShi」のようなやり方はとても新鮮でした。自分でもやったほうがいいと思いました。菅原さんが介護福祉士とアーティストという二つの役割を持っていて、仕事の中で“役割を演じる”という比重が大きかったのでしょう。二つの仕事を一つに結び付けたら生まれた企画はとても新鮮に感じました。

横堀：

新長田でもよくあるのですが、国際交流では、生活のために日本語の学習を支援することや交流を図ることも大事なんですが、海外から来た人々が持っている文化とか、大事にしていることを日本人側も知って、たくさんの文化が地域の中で発信されるという状況が、本当に豊かな社会を築くのではないかなと思うんです。いろいろな文化がまちの中で可視化されることと、他者と出会って化学反応を起こせる場が大事。第1セッションでも出ましたが、それは子どもの教育につながってくことで、外国をルーツとする子どもたちが、自分の文化をいかに誇りに思えるかが今後生きていく上ですごく大事です。

若林：

異なる文化に出合う場所を作るというのは、アートは大得意だと思います。堤さん、新長田や黄金町の事例を聞いて、感想や質問はありますか？

堤：

お二人の事例を伺って、発表や表現も大事だけど、

その前にアーティストがまちに出ていって、まちの人や歴史をリサーチした上で作品を作っているということが特徴的で、リサーチで得るものが今後のヒントになると思いました。

山野：

海外の皆さんは、このまちの歴史を話すと、だいたいこの町に住む日本の方を調査し、自分の国の人で定住する人たちにアプローチして作品化していきます。私たちが介入できないところに、アーティストは身軽に飛び越えて入っていける部分がある。また地域との距離感にしても、NPOの立ち位置としてべったりくっつくことはできないのですが、アーティストが近づいていくぶんには全然構わないですよ。



今はアーティストの定住化を進めています。そして地域コミュニティのメンバーになってもらう。これはやろうと思って実現したのではなく、放っておいたらそんな現象が起きたので、これはいいなと思って積極的に促進しています。コミュニティ対アーティストという構図から、どちらでもあるというような立ち位置が増えたらいいなと思っています。お祭りや町内会、ひょっとしたらPTAの役員とか、そんなアーティストたちが増えたらいいですね。

若林：

媒介者が定住してくれたらそんなにいいことはないですよ。

では最後に、多国籍社会がこれから到来してくる、多文化共生の地域づくりについて、アートの立場か

ら思うこと、提案などあればお願いします。



堤：

アートは正しいとか正しくないで分けられない領域であることが魅力的で、だからこそマイノリティーの歴史や背景も拾えるので、多文化共生でも活用していけたらと思うし、また、「老いのプレーパーク」の集団がこれから三重県内のいろんな所で発生してほしいなと思っています。

横堀：

一つは、2018 年の国際交流基金地球市民賞のフォローアップ事業のセッションでこれからやりたいこととして、多様な言語が交じり合うごちゃまぜの紅白歌合戦カラオケ大会をやりたいと言っていたのですが、この（2019 年）10 月に実現します。いろいろなルーツを持つ方々に来ていただいて、歌を通してそのまちの歴史を知るということをやりたいと思っています。

二つ目は、いろいろな人が混在できる場を作れるというのがアートの一つの役割だと思うのですが、もう一つ、表現という意味において、自分の困難な状況をプラスに変えていくことができると思うんです。これからのスターは移民の子どもたちの中から生まれるのではないかという話が出ているくらい、自分たちの立場の困難さを強力なバネにして、それを世界に発信していける人が生まれてくる。そんな気がします。

山野：

2018 年から東南アジアを中心に、アーティスト・イン・レジデンスをやってみたい人をインターンとして採用し、アーティストのサポートの勉強をしてもらっているのですが、彼らと接するうちに、うちのスタッフも多国籍化したいと思うようになりました。また、このようなシンポジウムに、多様な人々が自然と集まるような環境を作っていきたいですね。

《番外編》 3月26日ワークショップより
アートによる社会課題の解決
～三重県文化会館の取り組み～
「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト

三重県文化会館はアートによる社会課題の解決にも積極的に取り組んでいる。シンポジウム前日に行ったワークショップでは、超高齢化社会に向けた取り組みについて、俳優で介護福祉士の Oibokkeshi 代表、菅原直樹さんと、三重県文化会館の事業担当者、堤佳奈さんにお話いただいた。

登壇者

菅原 直樹 (Oibokkeshi (オイ・ボッケ・シ) 代表)

堤 佳奈 (三重県文化会館「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト担当)

菅原：

「Oibokkeshi (オイ・ボッケ・シ)」とは、おい・ボケ・死から命名したものです。俳優業の傍ら特別養護老人ホームで働き始めてから、マイナスのイメージだったおい・ボケ・死というものが、実は向き合うことによって前向きになれるのではないかという発見があったんです。老人ホームで見ている老いの豊かな世界を、芸術文化を通じて地域に発信し、ゆくゆくは地域でおい・ボケ・死を隔離するのではなく、受け入れる文化を創出する手伝いができたらと思い、岡山で活動しています。



三重県文化会館の堤さんと Oibokkeshi 代表の菅原さん

具体的には、認知症のお年寄りとの関わり方を、演劇を通じて楽しみながら考える「おいと演劇のワークショップ」というものを行っています。認知症の方は記憶障害で人を間違えたり、場所がわからなく

なったり、そういう失敗が多くなってきます。そのときに介護者がいちいちボケを正したり、失敗を指摘したりするのではなく、受け入れることも大事なのではないかということに気がきました。理屈にこだわるのではなく、感情に寄り添う関わり方をしたほうがいいのではないかと。認知症の方々が世界を尊重した関わり方をすることが大切で、ときには私たちの常識とは違うことでも受け入れたり、僕らに見えないものでも見たふりをしたり、介護者は“俳優”になってもいいのではないかなと思ったんです。



老人ハイスクール DX』練習風景

撮影：松原豊

三重県では三重県文化会館と共に「介護を楽しむ・明るく老いる」アートプロジェクトを 2017 年から実施しています。

「介護を楽しむ」では、三重県内の介護現場、専門学校等での「おいと演劇のワークショップ」を三重県文化会館さん主催で実施しています。「明るく老いる」は、地域で「おいのプレーパーク」という集団とお芝居を作ります。メンバーを公募し 19-80 歳の様々な年代で結成、去年の春から月に 1 回のワークショップを行い、秋から冬にかけて発表公演に向けて稽古を行っています。その中で出たアイデアを生かして「老人ハイスクール」発表公演を作ることになりました。皆さんのアイデアを元に僕が脚本を書きます。

「人生はごっこ遊び、死ぬまで遊び続けよう」社会の役に立たなくても自分が楽しければそれで充分なのではないか。これはこのおいのプレーパークを

通じて皆さんと共有できた価値観です。

令和の高齢社会を生き抜くためには、いかに豊かに老いていくかが重要になってきます。年をとっていくことでいろいろ衰えますが、そのことによって価値がなくなってしまうのはつらいこと。しかし、考え方によっては、老いることで新しい価値を見いだすこともあるのでは？ 老いを悲しむのではなく、老いを楽しむ。このような価値観の転換が重要で、そこに芸術・文化は大きな力を発揮すると思っています。

また、老いるとは体、心、人との関係性すべてに影響を及ぼすものですが、演劇は身体と心の関係性にダイレクトにつながる芸術表現です。年を重ねることによって周りを暗くするのではなく、周りを明るくさせる演劇ができればよいと思います。そして、新しい価値を見いだして、その価値観を表現する道具としても演劇はとても良いのです。本や映画は残るけど、演劇は残らないので、今この瞬間を楽しもうという気持ちが強くなる。そういうのもより良く生きる、より良く老いるということにつながるのではないのでしょうか。



堤：

「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクトに菅原さんと一緒に取り組んでいます。日本人同士ですら隣人との交流がない。ましてや世代間の交流や外国の方との交流がなく、わからないから勝手にイメージで考えて敬遠してしまったりしてしまう。このプロジェクトはそういうときに意味があるものだなということを実感しました。

菅原さんは、例えばセリフを覚えられない参加者の人たちとどういうふうにお芝居を作るのかというと、そのような方には認知症役をやっていただきます。進めていくうちに途中でセリフが飛んだりしますが、それを助言するシーンが、本当に忘れているのか、役で忘れているのかわからなくなる錯覚に陥ったりします。

こんなふうには、私たちが当たり前と思っていることは全然当たり前ではなくて、演劇というアートによって価値観が揺るがされるのを、プロジェクトを通じて経験しました。

『老人ハイスクール DX』発表公演

撮影：松原豊



介護施設や病院での体験講座では、認知症の人の接し方について、認知症の人の世界に入りこんで一緒にその世界を共有して接するとき、マニュアルに縛られるのではなく、同じ言葉をかけるにも気持ちも乗せて話すことが大事だと思うんです。これは、外国の方などと接するときにもつながることだと思います。そういう部分もコミュニケーションのキーワードになると思いました。

◆三重県文化会館

「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト

<https://www.center-mie.or.jp/oibokenbun>

来場者アンケート

ゲストの方々のお話から、人とのつながりの大切さを改めて感じました。また、今まで外国人に縁のない人たちを巻き込んで活動に参加する人々の裾野を広げていくことに興味を持ちました。無関心層の取り込みをするアクションが大事だと思いました。

日本に来ている外国人がいかに多様で、そこから学ぶべき私たちの得るものの多さを改めて感じました。

地域での活動に行き詰まりを感じていたので、いろんな活動を聞き、勇気をもらい、改めていろいろと考えることができました。

「多文化」という言葉にさまざまな意味があり、その取り組みが全国で進められていることを知れて良かったです。

盛りだくさんでいろいろな視点で話が伺えて良かったです。特にアートというのは腹落ちしました。

取り組みのヒントがたくさんあり、個性的な方の話が聞けた。いろいろな文化が見られるまちにできると良いとの話には共感しました。

高校生の立場からも学べることが多くて良かったです。

「介護を楽しむ」「明るく老いる」プロジェクトのような取り組みを初めて知ることができて良かったです。今回のように多様性に寛容な社会づくりに向けた事例についてもっと学べる機会が増えてほしいと思います。

アートの持つ意味と可能性についてなるほどと思った。対立軸を作らない、ボーダーを引かないという言葉が心に残った。また、全国でさまざまな取り組みがなされていることに力が湧きました。

役を演じることによって他者を理解するという考え方がとても新鮮でした。各団体の熱い思いが聞けて、とても刺激的でした。

各セッション、もっと長くてもいいくらい。もっと話が聞きたかった。アートによる多様性の受け入れの取り組みは今後ますます増えていってほしいと思いました。

